

「今、在住外国人に対して何ができるのか～教育の視点から～」

東京学芸大学国際教育センター 佐藤郡衛

1. 今日の講座のねらい

- (1) 自分の足下から共生を考えること
- (2) 「日本語教育」の課題について考えること。

2. 1つのケースから

- (1) ケースワークを―ある「日本語教師」の悩みを事例にして
- (2) 振り返り
 - ① 「帰属錯誤」を知る
 - ・ たとえば、他人の行動を考えると、相手の性格や能力の影響を過大評価し、環境や状況の影響を過小評価する。
 - ・ 他人の失敗の原因を過度に本人の性質に帰属しやすいのではないか。
 - ② ステレオタイプの思考になりやすい。「スキーマ」(思考の枠組みにより情報処理を特定の方向に導く)と呼ばれる。過度に単純化すること、特にその人が所属する集団の一員だと知ると、その人もその集団に共通の特徴をもつと考えがち。ステレオタイプ化の危険性は、「初頭効果」、つまり目立つ情報(人種、性別、体格、年齢など)を重視してしまうこと。
 - ③ 「ピジン化」ということの意味
 - ④ 原因帰属の改善
 - ・ 自分は正しいと思いがちだが、間違えている可能性を自覚する。→自分の判断は常に正しいと思いきこんでいるが、はじめに間違いを犯すと正しいと過信している分、正確な原因にたどり着けない。
 - ・ 間違いを記録する。話し合う。

3. 「異文化間教育」という視点の重要性

- (1) 異文化間教育とは
 - ① 文化のあいだを、「考える」「理解する」「つなぐ」「こえる」「関連づける」「改善する」「変える」
 - ② 異なった文化をもつ人と人との関係をつくる。そのためには一定の知識や技能も必要。

(2) 「自文化中心主義」(単一文化的視点)の問題点

- ① 学習者を見る視点の形式化、狭窄化につながりやすい。
- ② 目標が一人歩きする、固定した内容を優先してしまう。
- ③ 学習者の多様な背景(学習履歴、学習意欲等)がみえにくい。

(3) 「異文化間教育」の視点をもつということとは

- ① まずは信頼関係をつくる。
- ② 多様な学習者に適切的なねらいを定める。
- ③ 素材、教材のもつ文化的な適正さを考える(文化の表象の問題)。
- ④ 方法の文化的差異(賞罰のもつ意味等)に注目する。
- ⑤ 評価の観点を考える。

(4) ことばと関係性—国語の教科書から

4. 「地域日本語教育」とは

(1) 日本語教育に関わることは—多様な意味を持ちつつ

- ① ボランティア活動:「困難を抱えている人に遭遇したとき、その人と自分の間にある経済的な、またその他の直接的な関係がなくても、また、その人が必ずしも自分と同じグループに属さなくても、つまり、自分と人種、国籍、性別、境遇など共有しなくても、その人と自分が相互依存性のタペストリー(関係性の集合体)によって結びついているという状況のかかわりをする。……相手との相互作用の中で意味を見出して、新しい価値を発見するには、双方の関係性を固定的なものにしない。」(金子郁容氏)。
- ② 地域の日本語教育:地域在住の外国籍住民との関わりを通して、その人たちのおかれた状況を改善するために、新たなつながりをつけて行動していくこと。
- ③ 生活の場での日本語の保障:日本語が十分でない人は、常に「沈黙」を強いられ、しかも自分を語ることばを持たないため「弱者」という位置づけがなされる。この状況を変え、社会参加を可能にする日本語学習のあり方をさぐること。
- ④ ことばを道具、技能としてだけではなく、経験と共通の意味とイメージを喚起することば、絆としてとらえる。

(2) 異文化間教育の視点からみると—地域の新しい関係性をつくっていくこと

- ① 両者の「自分づくり」(自己形成、自己成長の場)
- ② 関係づくり(他者とのネットワーク、皆で支え合う)
- ③ 地域づくり(新しい「公共空間」としての地域をつくりあげる場)

(3) 「地域日本語教育」の特徴（専門性）とは

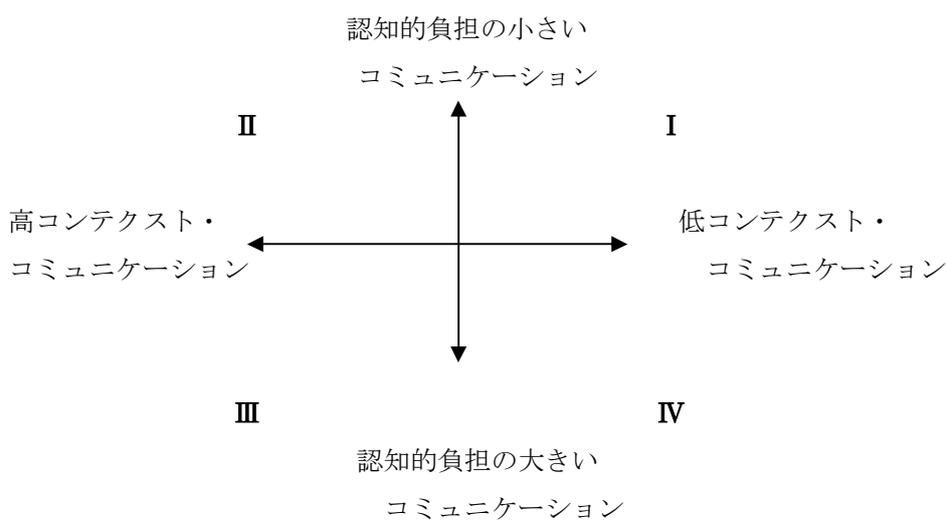
- ① 多様性に対応すること。ことばの体系が先にあるのではなく、生活が先にある。
- ② 現場志向性であること。目標と計画づくりが必要。学習者の学習の履歴・学習の経験を重視していくこと。
- ③ 学習者の「自己形成」を支えること。教材、友だちとの出会いを通して「自分づくり」を実現していく場。
- ④ 共同的で反省的な学びの場であること。教授場面でおきる多様なジレンマに遭遇し、問題解決的な思考を展開していくこと。日本語教師自身の変化・成長の場。（今日のケースをさらに発展させよう。）

(4) 「共生」のための地域をつくりあげる1つのプロセス

- ① 外国籍住民を孤立させないための場づくりと外国籍住民同士のネットワークづくり。
- ② 民族間交流、世代間交流の場。協働による連帯意識や地域意識をつくっていく場。
- ③ 参加をベースにした活動は、個人と組織のあり方や組織づくりの原理がこれまでと違うのではないか。それが、共生をめざした地域づくりになっていく。

5. 子どもの日本語教育への課題—基本的な考え方を

- (1) 子どもの居場所づくりから始めよう
- (2) 関係をつくる言葉の支援が大切
- (3) 子どもの日本語教育を考える枠組みを考えよう



(4) 学習するための言葉の獲得を

- ① 学習するための言葉とは。
- ② 言葉の習得と学習を切り離さずに統合すること（辞書的理解から概念理解へ）。
- ③ 具体物や直接的体験を支えにする。
- ④ スキーマを活性化すること。

(5) 学習を支える日本語の工夫と多様な学習支援

- ① 難しい言葉を簡単にする、単純な表現を用いる、多くの情報を何回かに分ける等。
- ② 学習をスモールステップに
- ③ 日本語での発信を重視する工夫（受動的理解から発信的理解へ）
- ④ 活動を基礎にした工夫